

平安中期の「折り枝」表現

岡田 ひろみ

1. はじめに

平安時代の物語や歌集を読んでいると、当時の人々が和歌の贈答の際に、季節に合った植物の折り枝や、紙の色に工夫を凝らしてやりとりしている様うかがえる。では、いつ頃から手紙に植物の折り枝を付けるようになったのか。

私家集を紐解くと、『人丸集』『赤人集』『家持集』には見えないが、『猿丸集』『小町集』『業平集』『素性集』などなど、和歌に折り枝を付ける例は9世紀の歌人の家集に多くみられるようになる。

・ 雨の降りける日、八重山吹を折りて人のがりやるとよめる

春雨に匂へる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花（『猿丸集』I・33）

・ 三月つごもりばかりに、桜の花を、雨の降る日、人のもとへ折りてたてまつる

濡れつつぞしひて折りつる桜花春はいくかもあらじとおもへば（『業平集』I・5）

それぞれ詞書に記された「雨」という天候と折り枝は、和歌内容を補完する。春雨に美しく咲き、湿気により香りもひきたつ八重山吹、雨の日にもかかわらず、強いて折り取った桜花は、歌中だけでなく、折り枝によって現実世界に実体として再現される。

料紙を用いず、木々の枝や花そのものに歌が書きつけられもする。

・ 西院の後御髪おろさせたまて、おこなはせたまひけるとき、この院の中島の松をけづり書きつけける（『素性集』II・46詞書）

・ かりそめばかりおもひし人の、まめやかにかたらふ人いできぬとききて、うつろひたる萩の下葉に書きて（『馬内侍集』146詞書）

『素性集』の場合は、「松」の木を削って文字を書きつけたものであるから、折り枝とはいえないかもしれないが、植物に和歌を書きつけた例としてあげておきたい。『馬内侍集』のように「萩」という小さな葉に歌を書きつけた例もあり、素材も方法もバリエーションに富む。紙ではなく植物それ自体に歌が書きつけられる場合、もらった当人は、読むために折り枝に目を凝らすことになる。

そもそも、和歌や手紙とともにではなく、折り枝のみが二人の間を行きかうやりとりもある。

人のもとに花のいと高きをやりたれば忍ぶ草をなむをこせたりける（『伊勢集』II・241詞書）

「花のいと高き」をある人に送ると、先方が「忍ぶ草」を返してきた、という。この後の伊勢の連作（5首）から「花のいと高き」折り枝は「花薄」（尾花）であるこ

とが分かる。まず最初の二人のコミュニケーションが折り枝のみで行われているのは興味深い。折り枝が和歌の添え物ではなく、独立し作用する表現としてみることができるからである。もちろんそれを可能にするのは、相手への思いが表にあらわれる「尾花」と、表面には出ないけれども相手を恋偲ぶ「忍ぶ草」という歌ことばに支えられるからであるが、二人のやりとりの中で、折り枝は「ことば」としてはたらいっている¹⁾。

このように、9世紀にはすでに様々な折り枝の用いられ方があり、『古今集』『後撰集』といった勅撰集、『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』、『宇津保物語』や『伊勢物語』、『源氏物語』といった10世紀から11世紀の文学作品からも、当時折り枝のやりとりが好まれたことがうかがえる²⁾。折り枝は平安初期から中期にかけて急速に発展した文化であったのだろう。そして、時に作品中の折り枝が、「風流な演出以上の意味、歌や口上の手紙の詞以上の情報・異質な情報」を示し、登場人物に、更に読者に提示する³⁾。個々の作品を読む上で、折り枝が文学表現の一機能としてあったことは疑いようがなく、折り枝を起点とした先行研究も多い⁴⁾。

しかし一方で、平安中期という王朝文学が花開いた時期の中で、折り枝の素材を限定せず、全体としての表現の特徴を見ることはあまりされてこなかったように思われる⁵⁾。様々な折り枝の用いられ方があつた中で、それぞれの作品の中で、もしくは時代の流れの中で共通もしくは変化した方法があるのか。そもそも、当時用いられた折り枝による表現とはどのようなものとしてとらえられるのか。

そこで、本稿では、折り枝のやりとりに着目し、まずは平安初期から中期にかけての歌人の家集や文学作品を中心にたどりつつ、折り枝表現の特徴を明らかにしてみたい。

その際の折り枝の範疇であるが、木々の折り枝だけでなく、草花実も含め、植物のやりとりがあつた場合に「折り枝」表現としてみてゆく。

2. 「折り枝」の様態による表現性

折り枝のやりとりがなされる際、手紙と折り枝はどのような状態で贈られたのだろうか。折り枝がどのように叙述されるか着目し、表現内容とどのような関係があるのか考えたい。

折り枝を贈る際、その動作行為として「たてまつる」「やる」等がある。

[たてまつる]

- ・花のいとおもしろきを式部卿にたてまつるとて(『伊勢集』Ⅱ・148 詞書)
- ・ある人のやまぶきたてまつるに(『忠見集』Ⅰ・158 詞書)
- ・在中将に、後の宮より菊を召しければ、たてまつりけるついでに(『大和物語』163段)

「たてまつる」の場合、相手が上位者であることはもちろんだが、相手に所望されたもしくは、贈答品として贈る、というような和歌よりもむしろ植物を贈ることが主目的であることが多い。折り枝が添え物ではなく、和歌が添え物であるともいえる。

[やる]

- ・山桜を人にやりはべりとて
君見よたとづねて折れる山桜ふりに
し色と思はざらなむ(『伊勢集』Ⅰ・

453)

・萩の花人にやるとて
さを鹿のねになきそむる秋萩を折り
てぞ見ゆる人のころは(『元真集』
141)

「やる」も「たてまつる」と同じで、折り枝そのものを贈ることが目的であることが多い。相手のために枝を折った、と特別なものであることが和歌でも強調される。「たてまつる」「やる」と共通して、男女間だけでなく、同性同士や主従間でのやりとりが多いことも特徴の一つである。

和歌や手紙は折り枝に「さし」たり、「つけ」「書」いたりもする。

[さす]

・枯れたる浅茅に文さしたりける、
かへりごとに(『小町集』I・71詞書)
・まことはじめし賢木にさして(『敦忠集』118詞書)
・うつろへる菊にさして(『敦忠集』
I・126詞書)
・女の許に紅梅さしてつかはしし
(『能宣集』I・356詞書)
・馬内侍、山吹にさして
やへながらあだに見ゆれば山吹の下
にぞなげくみでのかわづは(『齋宮
女御集』II・63)

手紙は折り枝に「さす」ものであった。木の枝や菊のようなしっかりとした植物だけでなく、浅茅のような草にも手紙をさしている。「さす」とは、「ある物を他の物の中にはさみ入れる」(『日本国語大辞典』小学館)意味であり、折り枝に手紙をはさみこんでいる、と解されることが多いようだ。木々の枝の間に手紙がはさみこまれる状態がイメージされる。茅の場合は束ねることも多いので「さす」とも

表現されるのだろう。葉や花びらにさす例は見られない。

『馬内侍集』の例は齋宮女御に贈ったものであり、男女間のやりとりに限定されるものではない。

[つく]

・……水瀬殿の花おもしろければつ
けておくる
桜花匂ふをみつつかへるにはしづこ
ころなき物にぞありける(『兼輔集』
I・12)
・かにひの花につけて
花の色のこきをみすとてこきたるを
おろかに人はおもふらんやぞ(『伊
勢集』I・465)
・蓑虫のつける枝につけて、人
うつろはぬ花のあたりをたづねつ
ついをれる虫をあはれとぞおもふ(『中
務集』I・145)
・……あやめの根につけて(『能宣
集』I・14詞書)
・……萩の葉の紅葉たるにつけてお
こせたり(『貫之集』884詞書)
・……うつろひたる菊につけて(『伊
尹集』16詞書)

圧倒的に多いのが折り枝に手紙を「つけ」るパターンである。「つけ」る折り枝も、花や枝、根や葉など、種類を問わずに用いられる。すべての素材に対応する汎用性の高い表現といえる。手紙があり、それに折り枝を付ける、ということであれば折り枝が添え物としてある場合も多い。折り枝が「文付枝」「付け枝」と呼ばれることが思い合わされる。

[書きつく(書く)]

折り枝に書きつける場合、そこに和歌や手紙を書きつける「紙」の存在はない。

文字が書かれていることに気づくまでは、折り枝のみがやりとりされるようにも見える。その点で、ここまで見た形態と違うものとして位置づけることができる。そのため、少し詳細に検討してゆきたい。

・……柿の紅葉にかく書きつけたり
(『伊勢集』I・1詞書)

・帝物におはしましけるついでに、
桂なる家におはしまして、その花に書きつけさせたまひける
梅の花香だにのこらずなりにけり匂ひてだにやをしまざりつる(『伊勢集』I・250)

『伊勢集』1番歌は、伊勢の恋人だった仲平からの「柿の紅葉」の折り枝である⁶⁾。250番歌は、宇多帝からのものであるが、桂は伊勢との間に生まれた皇子が育てられた場所でもある。その意味で桂の「梅の花」だからこそ、和歌を書きつけたと考えるのは深読みであろうか⁷⁾。

・本院の鞞負に、柑子の皮に書きて
うすけれどもすくもあらず山吹の八重のいろにし思ひそむれば(『朝忠集』I・25)

・かりそめばかりおもひし人の、まめやかにかたらふ人いできぬとききて、うつろひたる萩の下葉に書きて
うつろふは下葉ばかりと見しほどにやがて秋にもなりにけるかな(『馬内侍集』146)

これらもすべて恋の和歌の範疇にあるように思われる。『朝忠集』では、「柑子の皮」の黄色の薄さを和歌で詠みながら、あなたへの思いは「八重山吹」のように深い色をしている、というのだろう。『馬内侍集』の「うつろひたる萩の下葉」に相

手の心変わりを示し、しかも「下葉」だけにとどまらずすっかり「秋(飽き)」が来たことと重ねている。

このような異性としてお互いを意識する関係の中で、和歌を折り枝に書きつける例は、文学作品では特に『うつほ物語』に顕著な方法であった。

・仲忠からあて宮へ

かの仲忠の侍従、内裏の御使に、水尾といふ所に詣でて帰るに、をかしき松に、面白き藤の懸かれるを、松の枝ながら折りて持ていまして、花びらに、かく書きつく。

「奥山にいく世経ぬらむ藤の花隠れて深き色をだに見て

『かくなむ』とだに」とて、……(春日詣・150頁)

・仲頼からあて宮へ

……をかしき柳の萌え出でたりけるに書きつけたり。

物思ひの枝に籠れるものならばもえわたるとも見せずぞあらしとて、宮あこ君に……(春日詣・150頁)

・仲忠からあて宮へ

……さてのみは、えあるまじければ、面白き萩を折りて、葉に、かく書きつく。

秋萩の下葉に宿る白露も色には出づるものにざりける

とて、孫王の君に……(嵯峨の院・160頁)

全て男たちがあて宮へ恋心を訴えるものとして贈られている。藤の「花びら」、柳や萩の葉のような文字を書くのが困難に思われるような素材に彼らは和歌を書く。もらったあて宮側は、植物だけが

目の前に置かれるわけで、「受取人が差出人に対して興味がなかったとしても」「贈られてきた植物をじっくり見るしかない」⁸⁾く、彼らが折り枝に和歌を書きつける理由はそのような効果も期待している。逆に東宮が折り枝に和歌を書きつけるということがないのも、その身分の高さゆえ（読んでもらえない、ということも前提としない）として理解できる。

葉や花びらに書きつける場合、必ず恋の歌というわけではない。

……童のこことやうなるなむ、柏に書きたる文をもて来たる。とりて見れば、
みな人は花の衣になりぬなり苔の
たもとよかはきだにせよ（『大和物語』168段）

法師となった良少将が、妻に出家したことを告げる際に柏に和歌を書きつけておくっている。「柏に書きたる文」という表現からすると、童も受け取った妻も「柏」の葉を「文」として認識しているようなので、他の折り枝に書きつけた場合と区別する必要があるかもしれない。「柏」は限りなく「紙」に近かったようにとらえられるからである⁹⁾。

若干の例外はあるにしても、折り枝に文字を書きつける場合、二人の関係が親密である（あった）か、もしくは親密になりたい際に用いられているようにも感じられる。恋歌を葉や花びらに書きつけたのは、『うつほ物語』が初例である、との指摘もある¹⁰⁾が、こうして見てゆくと、求婚する歌でないにしても、折り枝自体に和歌を書きつける場合、『うつほ物語』だけでなく私家集をはじめとした作品において恋とかかわる点は留意すべき特徴であろう。

『源氏物語』紅葉賀巻（①330頁）におい

て、命婦は光源氏への返歌を藤壺に乞うた際、「塵をだに、この（常夏、撫子の）花びらに」と発言する。命婦の言葉は古歌「塵をだに据糸じとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝る常夏の花」（『古今集』夏・167）をふまえており、これをうけて書かれた藤壺の返歌が、「花びら」に書かれたものと解釈されることはほとんどないが、藤壺の和歌が、決して光源氏以外の人に読まれてはならない和歌であることを思うと、ここでみてきたような折り枝に和歌を書く、という表現の枠組みの中でとらえなおす必要があるように思われる。

3. 変心の表出としての「折り枝」

花が美しいのはひとときである。いづれ散り、木草は枯れる。そういった植物の、生花の欠点ともいうべき特性を活かし、折り枝は用いられている。折り枝は決して「手紙を飾る美しい小道具」というばかりではない。

実もなき苗の穂に文をさして、人のもとへやる

あき風にあふたのみこそ悲しけれ
わが身むなしく成りぬと思へば（『小町集』Ⅱ・21）

「実もなき苗の穂」は、相手の男に「飽き」られて「むなしく」になってしまうわが身をたとえる折り枝である。

男の夜離れを植物が枯れる様にとえもする。

枯れたる浅茅に文さしたりける、
かへりごと

時過ぎてかれゆく小野の浅茅には今は思ひぞたえずもえける（『小町集』Ⅱ・71）

通ひ侍りし女の忘れがたになりし

に、小さき木のもとす糸の枯れた
りしにつけて、女
わびつつはす糸のよをだにたのむべ
きそれしもぞまづかれまさりける
(『兼澄集』Ⅱ・43)

秋も過ぎすっかり「枯れた浅茅」の折り
枝に男の夜離れを込める¹¹⁾。「もとす糸」
とは木の全ての部分をさすから、すっか
り枯れきった木に男の心が「離れた」こ
とをたとえている。将来を頼むべくもな
いことを嘆く和歌であり、「枯れた木」は、
女の身のたとえでもあるかもしれない。
花の散る様に変心を見ることもある。

はるかむの宰相、左近の中将にて
紅梅を折りておこせたりし
君がため我折る宿の梅の花色にぞ出
づる深き心は
とある返し

色も香もともに匂へる梅の花散る
うたがひのあるや何なり(『兼輔集』
Ⅰ・6、7)

ここでやりとりされる「紅梅」に、男の側
は女を思う「深き心」を見、女の側はいず
れ散る花に男の心変わりを「うたが」う。
このようなやりとりは、

藤原ただゆきの身の沈むよしなげ
きける、とぶらひにやりけるかへ
りごとに、菊の花を折りて、
枝も葉もうつろふ秋の菊みればはて
は影なくなりぬべらなり
とあへるかへしに
しづくもて齡延ぶてふ花なれば千
代の秋にぞ影はみつらん(『友則集』
60、61)

の中にもうかがえる。見舞いの返答とし
て、「菊の花」の折り枝の中に「(花のみな
らず)枝も葉もうつろい、時世に合わず

枯れしぼんでしまうわが身や他人の心変
わりを暗に示し、受け取り手は、菊の露
をふくんだ綿で身をぬぐうと延命される
ことによそえ、「菊の花」の意図を読み替
えて返歌する。おなじ菊の花の折り枝を
とおして、二人は全く別の意味をみる。
眼前にある折り枝は同じものだが、それ
ぞれが素材から選択し詠んだ和歌によっ
て意味がきりかわる。折り枝が含む王朝
語としての、多層的なイメージによって
支えられている。

植物は植えられるもの、ということの
のかかわりでは次のように用いられる。
いかでとおもひける人のこと人さ
だまりたるに女郎花につけて
ふたばよりのみしものを女郎花
人の垣根におひにけるかな(『敦忠
集』24)

女を「女郎花」にたとえ、その折り枝を
「人の垣根」に植えられたものとして装え
ることで、他の男と結ばれたことを示す。

折り枝による表現は、以上のような様々
なパターンがあるが、折り枝を用いて相手
の変心を表現する例が特に目立つ。馬内
侍や大式高遠の周辺では折り枝による表
現が多く交わされているので、その中でも
変心を示す折り枝表現を参考までにあげ
ると、『馬内侍集』には、「まだらなる草葉」
(35)、「つばみたる花」(36)、「かれたるも
みじの枝」(79)、「柏木の若き葉」(83)、「う
つろひたる萩の下葉」(146)、『高遠集』に
は、「桜の花の散りたる枝」(1)、「女郎花の
枯れたる枝」(19)、「梅の花の散りたる枝」
(89)、「うつろひたる菊」(317)、「枯れた
る菊」(321)など多様である。

物語においては、どうであろうか。

恨みけむほどは知られて唐衣袖濡

れ渡る年ぞ経にける

と書きて、折りに挿されたりし紅葉
の枯れ困じたるにつけて出だされたり
(『うつほ物語』葦開中565頁)

北の方が藤原兼雅に対して贈った和歌だが、「紅葉の枯れ困じたる」折り枝には、兼雅の心が離れたまま年月が経ったことがよそえられている。

他に「菊の花のうつろへる」を折って相手を試そうとする「なま心ある女」と男のやりとり(『伊勢物語』18段)もあるが、植物の「うつろひ」や「枯れ」た折り枝のやりとりを通して変心を嘆く例は、実は物語においてそれほど多く用いられていない。私家集において「枯れた花」が示す二人の関係は、終わりを告げたものが多かった。当然かもしれないが、枯れた花がそのまま消えてなくなるように、二人の関係が改善したり復活したりすることが「枯れた」状態の草花には示されない。逆にいえば、二人の関係の終わりを示すときにこそ、このような折り枝が用いられているように思われる。『源氏物語』朝顔巻において、「枯れて」に「ほひもことに変れる」朝顔(該当場面は容色の衰えを示すものであるが)を贈った光源氏と朝顔齋院との恋がこのやりとりの後、終わったものとして描かれていることも納得がゆく¹²⁾。

4. 来訪を促す「折り枝」

「折り枝」は時に相手の訪問を促す。

里にはべりし折、花のいとおもしろ
きを式部卿にたてまつるとて

ふるさとの荒れてなりたる秋の野
に花見がてらに来る人もがな(『伊勢集』I・148)

(あなたが来ないから)家は荒れている

が、「花」が美しいから花見がてらに訪れてほしい、という。女から男へ詠みかけた異例ともいえる行為は、「花」を「たてまつる」(献上する)という名目を装ってなされたといえようか。「花」とは暗に伊勢自身も指すのだろう。「花のいとおもしろき」折り枝によって、男の来訪を乞う和歌内容が補完され、吸引力を増す表現として機能するのである。

訪れて美しさに気付く、ということもある。

……この男のもとより、女の親の家は五条わたりなるに来て、柿の紅葉にかく書きつけたり

人住まず荒れたる宿を来てみれば
今ぞこの葉は錦織りける(『伊勢集』

I・1)

「今ぞこの葉は錦織りける」という男の驚きは、実際に訪れて手にとっている「柿の紅葉」という証拠にも支えられている。更にいえばその折り枝には色づいた紅葉に象徴される男の思いと、女の美しさがこめられていよう。

男が大将に婿取られたことで、失意のもと実家に下がっていた伊勢だったが、再び「柿の紅葉」を契機にしてやりとりがはじまるのである。

折り枝を贈り、花見にかこつけて訪問を乞うのは、伊勢の娘中務詠にもある

はや住みし家の桜を箱に入れて人
年を経てをりける人もとはなくに
春を過ぐさぬ花を見よ君(『中務集』

I・153)

相手に「花を見よ」とはっきりと告げる。長い間訪問しない相手に対して毎春忘れず咲く花を見にくるよう、つまり我が家を訪うよう誘っているのである。

こうしてみてもゆくと、次の『蜻蛉日記』の一コマも訪問をうながす折り枝表現の中に据えることができるのではないか。

つとめて、なほもあらじと思ひて、
なげきつつひとり寝る夜のあくる
間はいかに久きものとかは知る
と、例よりはひきつろひて書いて、
移ろひたる菊にさしたり。(『蜻蛉日記』上巻100頁)

道綱母が兼家に贈った「移ろひたる菊」の折り枝の「移ろひ」に兼家の愛心をあてこする¹³⁾。しかし、当時移ろった菊を最も美しい状態として人々に賞美されたことを思えば、歌に「ひとり寝」のつらさを詠み、美しい菊の折り枝を手紙に添えることで、花(菊)を見に我が家を訪ねてほしい、と兼家に甘える道綱母の姿がそこには見えてはこないだろうか。¹⁴⁾「ひきつろひて書いて」冷静を装いつつ、一方で兼家の訪問を待っていることをこの折り枝は伝えているのである。

次の『源氏物語』帚木巻の夕顔が頭の中将对して贈った「撫子」も同様であろう。

……幼き者などもありしに思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。(中略)

やまがつの垣ほ荒るともをりをり
にあはれはかけよ撫子の露
思ひ出でしままにまかりたりしか
ば……(①82頁)

「撫子の花」とは二人の間の幼子の喩えではあるが、そもそもこの歌も「撫子」を贈ることで垣根に咲く撫子という花見がてらに男の来訪を求めているととらえることができる。従来、私(夕顔)よりも我が子(玉鬘)への愛情を訴えた歌としてとらえられているが、夕顔は夜離れがち

な頭の中将对して、私に逢いに来てほしい、との思いも込めたのである。

これら「桜」や「菊」や「撫子」という花々の折り枝は贈り主の邸宅に咲く花々でもあった。私に逢いに来て、と直接ことばに出せない女たちは、折り枝にかこつけて控えめながらも(実はストレートに)相手に来訪を求めたのではないか。和歌のみで訴えるのではなく、そこに「折り枝」という生きた花を添えることで相手もかつて訪問した女の庭を「今」のものとして感じるようになるのではなからうか。

5. まとめにかえて

和歌を詠み交わす際、なぜ折り枝が添えられるのか。歌集や日記、物語の中には和歌の贈答が記載されるが、すべての歌をとりあげて数を比較したならば、折り枝の存在が記されることの方が少数であることはいうまでもない。記されない場合、折り枝があったけれど記載されなかったのか、そもそも和歌だけだったのかは即断できないが、どちらにしろ作品に「折り枝」の存在を書き残している意味を軽くみることはできない。

以上のような問題意識の中で、折り枝の表現機能がどのようなものであるか考察した。折り枝が贈られる様態、やりとりの型から作品を絞らずみること、共通してあらわれる折り枝表現の系譜の一端を確認できたように思う。従来されてきたように、植物の素材に着目して、折り枝の役割を考えることも重要であるが、平安初期から中期にかけて時間を経ても底流する表現の共通性と、作品ごとの独自性の両方から考えてゆく必要があることを強く感じる。

今回あまりとりあげなかった、恋心の表出としての折り枝や、言語遊戯としての折り枝については更に別途みてゆかなければならない。更に、男から女へ、女から男へという場合の性による表現の差が折り枝にあるのかどうか、という観点も今後の課題としてあげられる。私家集の場合、自撰か他撰かということもあり、歌人の活動時期と家集での表現が同一のものとは限らないが、折り枝のやりとりにおいて、表現の共有が当時の文学作品の中でどの程度あったのかということも考えてみたい¹⁵⁾。

注

- 1) 拙稿「〈物〉の力——平安貴族のコミュニケーション」(『共立女子大学文芸学紀要』第60輯 2014年1月)で「折り枝」からはじまるやりとりについて考察している。
- 2) 平安中期までの作品にやりとりされる折り枝の用例数は以下のとおりである。『竹取物語』1、『伊勢物語』8、『大和物語』7、『平中物語』6、『うつほ物語』45、『落窪物語』6、『源氏物語』37、『土佐日記』0、『蜻蛉日記』13、『和泉式部日記』3、『紫式部日記』2、『万葉集』5、『古今集』7、『後撰集』32、『拾遺集』22
私家集に関しては、『私家集大成』中古Ⅰ所収のものをとりあげたが、諸本異同の甚だしいものも多く、用例の数え方も含め別稿を用意したい。
- 3) 鈴木裕子「折り枝という情報——『源氏物語』の贈答場面から」(『日本文学』2001年10月)
- 4) 例えば「菊」の折り枝について考察したものをあげると、今西祐一郎「蜻蛉日記「うつろひたる菊」(『〈新しい作品論へ〉、〈新しい教材論へ〉』古典編2 右文書院 2003年1月)、赤間恵都子「白菊のメッセージ——『蜻蛉日記』と『源氏物語』から——」(『十文字国文』9号 2003年3月)、鈴木裕子「菊の折り枝というメディア——『源氏物語』の贈答歌の場面から——」(『駒沢短大国文』34号 2004年3月)、などがある。
- 5) 田中仁「源氏物語の手紙一数と形と——」(『親和女子大学研究論叢』第21号 1988年2月)、同「宇津保物語の手紙一その形——」(『古典文学論注』1号 1990年7月)は、折り枝を含め各作品の手紙を特徴ごとに分類している。
- 6) 『伊勢集』Ⅱでは「垣の紅葉」とある。どちらでも解釈可能だが、淵江文也「鼠麴のもみぢ——伊勢集冒頭——」(『親和国文』14号 1979年12月)にも指摘のとおり、「柿」をとりそこに五条の鄙びた場のイメージをみたい。
- 7) ただし、Ⅰ類本以外は「書きつく」ではない。「花結びつけさせ給へる」(Ⅱ・252)、「その花につけさせ給へりける」(Ⅲ・252)とある。
- 8) 武藤那賀子「物に文字を書きつけること——『うつほ物語』の仲忠の例から——」(『学習院大学大学院 日本語日本文学』第7号 2011年3月)
- 9) 新編日本古典文学全集(小学館) 頭注には「物を盛ったり、包んだり、覆ったりするものとして使われているので、河原で祓えなどの儀式の時に使われたものか」とある。
- 10) 杉野恵子「花びらや葉に歌を書く(書きつく)という表現について——「うつほ物語」を中心に——」(『実践教育』

第19号 2000年3月)

- 11) 『古今和歌集』(恋五・790・小町姉)に同歌を所収するが、こちらは「焼けたる茅の葉」とあり、その場合は小町姉の燃えるような思いの火で焼けたことが折り枝によって表わされている。『古今和歌集』の場合、女が男の夜離れを嘆く歌というよりはむしろ、男が離れても相手を情熱的に思う姿がクローズアップされる。
- 12) 「朝顔」は『源氏物語』宿木巻において、薫と中の君の間にやりとりされる。早朝薫に折り取られた「はかなげ」に咲く朝顔は、扇に置いて中の君の前にさし入れられる。薫はそれを「やうやう赤みもて行くもなかなか色のあはひをかしく」思い、中の君は「置きながら枯るるけしき」ととらえていた。朝顔をめぐる二人の認識の違いが二人のズレも象徴するだろうが、物語世界の時間軸の中で色変わりする折り枝を描く例は、他の作品においてもみない。
- 14) 従来「兼家のあだし心、愛を失った女の悲しみを諷するものではあるが、菊としては最も賞美すべきもの」(日本古典文学大系脚注 1957年)、「兼家の愛情の衰えを響かす」(柿本奨『蜻蛉日記全注釈』角川書店 1966年)、「兼家の愛情の移ろいに、うちおれたわが身をよそえたもの」(新潮古典集成頭注 1982年)、「彼女の本朝第一の美人三人の内とされる容色と、この時の年齢からすれば、町の小路の女を意識した嫌味」(野口元大「古典解釈のアポリア——蜻蛉日記「嘆きつつ」歌の位相」(『上智大学国文学論集』17号 1984年1月)、「精一杯の皮肉を込め、冷静

さを装う」(斎藤菜穂子「蜻蛉日記における散文表現拡充の一過程——「なげきつつひとり寝る夜の」歌を中心とする記事から」『平安朝文学研究』復刊5号 1996年12月)、「兼家への愛情を示すのではなく、隔意を示す態度」(今西祐一郎注3同論)、「寵愛が薄れた自身の比喩」(吉海直人「道綱母「嘆きつつ」歌の解釈をめぐって」『解釈』2011年4月)等、多岐にわたる。

- 13) 後藤祥子氏がすでに「何に菊色染めかへし匂ふらむ花もてはやす君も来なくに」(『後撰集』秋下・読み人しらず)を引歌として指摘したうえで、「家や庭を繕ってひたすら男の訪れを待つ、いじらしい女の閨怨のため息」(『国文目白』1994年1月)の指摘は傾聴に値する。引歌の上でも、「折り枝」の表現の系譜の上でも、道綱母の「菊の折り枝」は兼家の来訪を待つ姿として機能している。
- 15) 瓦井裕子「菊と紅葉の表現史——一条朝前後の好尚とその背景——」(『語文』2015年12月)は、「菊と紅葉」のとりあわせに着目し、一条朝のある特定の集団の中に好んで用いられる表現があることを論じる。

※本文引用は、『蜻蛉日記』『伊勢物語』『大和物語』『源氏物語』、新編日本古典文学全集(小学館)、『宇津保物語』は『うつほ全』(おうふう)による。私家集は『私家集大成』を用いたが、表記・句読点等私に改めた箇所ある。

[付記] 本稿は、第52回表現学会全国大会(2015年6月7日)での口頭発表をもとに大幅に加筆修正したものである。御教示賜った先生方に深く御礼申し上げます。(共立女子大学)